

明治・大正期の高等女学校教育
—— 教育内容と評価 ——

関 口 礼 子

Education in Girls' High Schools between 1900 and 1926
—— Content of Education and Its Evaluation ——

Reiko W. Sekiguchi

- 1 Phrases Taught and Still Remembered
- 2 Educational Policy of Girls' High Schools
- 3 Change and Prevalence of Educational Policy
- 4 Conveyers of Educational Policy
- 5 Social and Sentimental Meaning of Girls' High Schools
- 6 Evaluation of Girls' High Schools

This is a part of the results of an empirical study made by mail on ladies who were graduated between 1900 and 1926 from girls' high schools called Koto Jo Gakko.

At first these ladies, who are now over seventy years of age, are asked to write words and phrases which they repeatedly heard in their school days and still remember. From these collections, the educational policy, by which high schools for girls were run in those days, is summerized as: "good wife, wise mother", which is the aim of education, the details of which may be further analysed as: a patriot "faithful to the emperor", a family member "obedient to parents", a life style "simple and economical", and personality "warm, good-minded, pure and gentle".

This educational policy of the central government seems to have been adopted in schools earlier in Eastern Japan than in Western Japan and to have lasted, once established, longer in rural cities than in urban areas. It was conveyed mainly through principals to students in earlier days. In later years, however, this role of the principal was spread among various teachers in any one school.

When the graduates think of their high schools nowadays, their most conspicuous picture is the social and sentimental meaning of school. Those who learned together keep, even today, more than half a century after their graduation, deep friendships, which are the main source of pleasure in their old age. Many recall their high school days, also, as the most pleasant time in their life.

Many appreciate highly the moral education with strict discipline that they received, and especially the simplicity of the life style. The author points out that the simplicity and economy of their life style which these elite women respected most highly are a characteristic of Japanese culture in its developing stage, which is not observed in other developing countries.

A smaller number, but still quite a few, appreciate the knowledge and techniques they learned at school.

Contrary to all these graduates quoted above, there are also a couple who raised criticisms against the strict school discipline.

1 記憶されている徳目

先に筆者は、「賢母良妻から良妻賢母へ」⁽¹⁾と題する論文において、明治32年に制定された高等女学校令がどのような世論をふまえ、どのような教育理念を実現すべくでき上ったものであったかを明らかにした。それに続いて本稿は、この法令のもとに設置された高等女学校では、実際にどのような教育が行なわれていたかを明らかにしようとするものである。

資料は、高等女学校で教育を受けたかつての生徒に、校訓や学神、在学中繰返し聞かされた言葉、校舎内外の額に書かれていた言葉を記述してもらったものである。⁽²⁾これらの卒業生は、卒業年次大正15年までのものを採ったので、現在、70歳以上の高齢である。したがって、記述されたものは、教授された内容のうちでも今なお記憶に残っているもの、すなわち、特に教育効果のあったものと解釈してよからう。

まず、学校別、卒業年次別に集められた資料を整理し、掲げてみよう。

栃木県立宇都宮高等女学校

明治30年卒 家庭和楽の中心となる

37年卒 良妻賢母，教育勸語，努力，いつも真面目

38年卒 良妻賢母，質実剛健

39年卒 金剛石の歌

40年卒 質素剛健，礼節，校歌，教育勸語

40年卒 天皇中心，愛国心，至誠

42年卒 教育勸語

42年卒 良妻賢母

42年卒 良妻賢母

42年卒 操の鏡

45年卒 こゝだとふみしめてあやうきふちにすべ
るな

45年卒 心身共に健全なる人となり忍耐勤勉にし
て事に当り献身もってその成功を楽しむ
べし，教育勸語

45年卒 忠孝

大正3年卒 忠君愛国

3年卒 むっとして帰れば門の柳かた，梶をしめ
て風に従う柳かた，貞淑，温順，忍耐，
博愛，勤勉

3年卒 温良清貞

4年卒 良妻賢母

4年卒 忠孝

4年卒 教育勸語，戊申詔書，忠孝，之誠，良妻
賢母，温良貞淑，その剛毅たる精神を包
むに温良なる声容をもってし忍耐勤勉献
身事に当りもってその成功を楽しむべし

4年卒 心身共に健全な人となり，忠実至誠

4年卒 良妻賢母，質実剛健

5年卒 温良清貞

6年卒 操，良妻賢母，質実剛健

6年卒 良妻賢母

- 6年卒 良妻賢母，至極通天，忍耐，真の味は物にあらずして心の安らかにあり，心身共に健全なる人となり忠実至誠以て聖旨に副え奉らんことを期す，己の位置を自覚してその分を守り絶えず修養を積みてその本務を促さんことをつとむべし，親愛の情に厚く和順にして貞淑の徳を供えんことを期すべし，高尚なる趣味を養い礼節を重んじ懇切にして家庭の和楽と幸福との源泉たらんことを心掛くべし，剛毅の精神を包むに温良なる声容を以てし忍耐勤勉献身事に当り以てその成功を楽しむべし
- 6年卒 心身共に健全なる人となり忠実至誠以て聖旨に副い奉らんことを心がくべし，温良貞淑，良妻賢母，質実剛健，誠至
- 7年卒 徳操修養，操の大切さ
- 7年卒 人は誠がなくてはいけない，良妻賢母，至誠
- 7年卒 良妻賢母，質実剛健，男女間の友達が無いよう，操橋
- 8年卒 がんばれ
- 9年卒 操橋
- 9年卒 良妻賢母
- 9年卒 男とつきあってはいけない，忠孝
- 9年卒 しっかりした信念，良妻賢母
- 9年卒 良妻賢母
- 10年卒 質実剛健，良妻賢母，温良貞淑
- 10年卒 温良貞淑，誠実
- 10年卒 元気，規律，親切
- 11年卒 人に迷惑をかけてはいけない，至誠
- 11年卒 質実剛健，温良貞淑，至誠，忠孝
- 12年卒 努力
- 14年卒 貞淑，正しき操，良妻賢母
- 14年卒 温良貞淑
- 14年卒 忠孝
- 14年卒 己の位置を自覚し至誠を以て，温良貞淑，質素節約
- 15年卒 良妻賢母
- 15年卒 謙讓の美德，質素，忍耐，勤勉献身
- 15年卒 忠孝，勤勉，貯蓄，報恩
- 15年卒 質実剛健

東京府立第2高等女学校

- 明治40年卒 忠君愛国
- 40年卒 富国強兵，滅私奉公

- 41年卒 正直勤勉
- 41年卒 堅実，貞淑，明朗，健康，幾可の問題を頭腦の訓練のためにすること
- 41年卒 忠孝，誠，至誠
- 43年卒 華美をいましめる，質素，堅実
- 大正3年卒 誠，誠実
- 3年卒 質素，儉約，良妻賢母
- 3年卒 礼儀正しく，目上の人をうやまう
- 4年卒 教育勅語
- 4年卒 富士の神山，質素，袴の丈は床上5寸，袖丈はクジラ尺の1尺8寸以下
- 5年卒 春風をもって人に接し秋風をもって自らをつつむ
- 5年卒 服装がひじょうに厳格
- 6年卒 質実剛健，勤勉，誠実
- 6年卒 質素儉約
- 7年卒 良妻賢母，質実剛健，忠孝
- 7年卒 良妻賢母
- 8年卒 先生に会えば頭を下げる，教育勅語
- 8年卒 温良，恭謙，質実剛健
- 8年卒 良妻賢母
- 8年卒 質素儉約
- 9年卒 良妻賢母
- 9年卒 良妻賢母
- 9年卒 良妻賢母，質素，親孝行
- 9年卒 良妻賢母
- 10年卒 良妻賢母，質素
- 11年卒 誠
- 11年卒 質素
- 13年卒 質素，良妻賢母
- 13年卒 質実剛健，健康
- 13年卒 質実剛健，良妻賢母
- 13年卒 質実剛健，良妻賢母
- 13年卒 良妻賢母
- 14年卒 質実剛健，質素儉約
- 14年卒 質素を旨とする事
- 14年卒 質実，木綿の着物着用
- 15年卒 質素，木綿の着物，白衿，元禄袖
- 15年卒 良妻賢母
- 15年卒 木綿衣服，中和
- 15年卒 良妻賢母

京都府立第1高等女学校

- 明治31年卒 全国から有能なる女が集った日本唯一の女学校
- 38年卒 良妻賢母

39年卒 外柔内剛
 39年卒 桜・柳の精神, 内剛外柔
 40年卒 良妻賢母, 知足安分
 40年卒 外柔内剛, 良妻賢母
 40年卒 外剛内柔(ママ)
 41年卒 外柔内剛, 姿勢を正しく, 毎朝洗顔, 深呼吸, 冷水摩擦
 41年卒 外柔内剛, 冷水摩擦
 41年卒 毎朝冷水で目を洗うこと
 42年卒 外柔内剛
 42年卒 忠孝, 親孝行
 42年卒 風になびけどその根は動かじ, 桜, 柳, 教育勸語
 42年卒 貞淑であれ
 42年卒 外柔内剛
 42年卒 言行心の一致, 教育勸語
 43年卒 夫唱婦随, 外柔内剛, 冷水摩擦, 食後のうがい, 目を冷水で洗う
 43年卒 良妻賢母
 43年卒 良妻賢母
 44年卒 外柔内剛, 府1女生徒の名を汚すな
 44年卒 宮様もご在学の有名校
 44年卒 質素儉約, 質実剛健
 45年卒 良妻賢母
 45年卒 柔よく剛を制す
 45年卒 良妻賢母
 45年卒 良妻賢母, 君に忠親に孝
 大正3年卒 質素儉約, 廃物利用, 良妻賢母, 姿勢を正し, 立腹して力を入れる, 忠, 孝, 外柔内剛
 3年卒 外柔内剛, 柳の木
 3年卒 良妻賢母, 内剛外柔
 4年卒 良妻賢母
 4年卒 外柔内剛
 5年卒 外柔内剛
 5年卒 皇室中心主義, 良妻賢母
 5年卒 外柔内剛
 5年卒 外柔内剛
 5年卒 体育, 衛生, しつけ等こまごま, 内は誠実剛健にして外は常にやさしく女らしく
 6年卒 外柔内剛, 徒歩主義, 良妻賢母
 6年卒 柳や桜の如く, 教育勸語を信条とするよう, 礼儀正しく, 作法もきびしかった, 忠孝, 父母に孝
 6年卒 冷水摩擦, 目を冷やす, 深呼吸, うがい, 忍, 外柔内剛

7年卒 外柔内剛
 7年卒 良妻賢母
 7年卒 外柔内剛
 7年卒 良妻賢母
 7年卒 忠孝, 貞淑, 外柔内剛
 8年卒 外柔内剛
 8年卒 良妻賢母, 皇室をうやまう事
 8年卒 外柔内剛, ぶるなかれ, らしくあれ
 9年卒 良妻賢母, 内剛外柔
 9年卒 温良貞淑
 9年卒 外柔内剛, 冷水摩擦を日々励行
 9年卒 良妻賢母
 9年卒 本気, 真面目
 9年卒 謙譲, 質素, 品性
 10年卒 良妻賢母
 10年卒 温良貞淑, 良妻賢母, 堪忍, 忍従
 11年卒 毅然とすること
 12年卒 しとやかさ, 女らしさ
 12年卒 校歌, 柳・桜, 外柔内剛, 上品な女学生
 12年卒 おしとやかに, 上品に, かしこい女たれ
 13年卒 校歌を鑑とすること, 貞淑
 14年卒 質実剛健, 勤勉努力
 15年卒 質素, 努力, 堅実, 礼節
 15年卒 品行方正, 質素

鳥取県立鳥取高等女学校

明治37年卒 温順貞淑
 40年卒 良妻賢母, 貞淑
 40年卒 校章の歌
 41年卒 温順貞淑
 42年卒 温順貞淑
 42年卒 淑徳
 42年卒 金剛石の歌, 教育勸語, 奉仕の精神, 独立自尊, 滅私奉公
 43年卒 整頓整理
 43年卒 忠孝信, 貞淑, 日々三省, 樹静ならんと欲すれど風止まず, 親に孝ならんと欲すれど親生なさず
 44年卒 教育勸語, 生徒心得
 45年卒 徽章, 松桜で婦徳, 為せばなる為さねばならぬ何事も為らぬは人のなさぬなりけり, 金剛もみがかざれば玉の光は出ざらん
 45年卒 温順貞淑
 45年卒 良妻賢母, 規律, 清潔整頓, 良き嫁たれ, 嫁は家の礎, 至誠

	てはならない	14年卒	(広島県立三次高等女学校)
12年卒	(岐阜県立加納高等女学校)		履正, 親切, 努力, 和
	敬愛信, しとやかなお嬢さん, 良妻賢母	15年卒	(長野県高等女学校名不明)
13年卒	(浜松市立浜松高等女学校)		至誠, 忠孝
	質素であれ	15年卒	(私立椋山高等女学校)
13年卒	(愛知県立安城高等女学校)		女らしく, 規則正しく, 良妻賢母, 誠実,
	二宮金次郎, 努力, 誠実		風紀を乱してはいけない, 袴の裾の長さ
13年卒	(岐阜県立中津高等女学校)	15年卒	(私立樟蔭高等女学校)
	良妻賢母		温故知新
14年卒	(奈良県立五條高等女学校)	15年卒	(山口県立萩高等女学校)
	女子でも職業を持って, 自立出来る女たれ		貞静
14年卒	(山形県立山形高等女学校)		
	質実剛健, 良妻賢母, 心廣体豊		

2 高等女学校の教育理念

「高等女学校令」発令は明治32年である。その当時の就学年数は6年であったから、したがって、「高等女学校令」による高等女学校が卒業生を出すのは、明治38年からということになる。しかし、その精神による教育は、明治32年以降すではじまっていたとみてよい。

これらの資料から読みとれるいくつかの事柄を整理してみよう。まず第1に、明治38年以降にはどの学校にも共通してあらわれてくる言葉がある。それらは、「良妻賢母」「忠君愛国」「忠」「天皇」「孝」「親に孝」「質素儉約」「質実剛健」「温良貞淑」などである。いずれの学校にも共通してみられるということは、教育勅語や文部大臣演説、文部省通達などを通じて伝達された国の方針を反映したものと考えられる。これらの徳目の内容は、「その他」の学校においても見出される。

この時代にあっては、「高等女学校令」制定以前の世論の中で優勢であった「賢母良妻」⁽³⁾の語はまったくみられず、「良妻賢母」という語一色に統一されている。「良妻賢母」がすなわち、高等女学校がその生徒を教育する一般に公認されていた目標である。

「忠国愛国」「忠」「天皇」などは国家主義精神を代表するもの、「孝」「親に孝」などは家族主義を表わすもの、「質素儉約」「質実剛健」などは生活態度を表わすもの、「温良貞淑」は性質を表わすもの、と整理できよう。すなわち、「良妻賢母」とは、その内容は、公においては天皇に忠たることをもって国を愛し、家庭にあっては親（結婚前は自分の親、嫁してからは夫の親）に孝行をつくし、その性質は反抗や怒りをあらわさず温良貞淑にて、その生活は、もくもくとして儉しく質素儉約を励行する、というものであったことを推論させる。

第2に、それに加えて、各学校の特色がみられる。その1つは、これらの言葉の他に、特に著しい色彩を加味していないもの（東京府立第2高等女学校）と、いろいろの色彩を加味している学校（京都府立第1高等女学校、栃木県立宇都宮高等女学校、鳥取県立鳥取高等女学校）のちがいである。色彩を加味せず、生のままの言葉そのものを用いている東京府立第2高等女学校の場合には、徳目をあげた頻度自体も少なく、徳目教育にはあまり熱心ではなかったことを物語っている。後者の独自の色彩を加味したものは、特に生活態度や性格を表わす標語に著しく特色が表われている。その中でもそ

の色彩加味の状況が、特に強い個性で色どられている学校（京都府立第1高等女学校、栃木県立宇都宮高等女学校）と、その加味された内容が多様である学校（鳥取県立鳥取高等女学校）がみられる。

性格を表わす標語ならびに生活態度を表わす標語については、各校の特色があらわれているとしたが、その特徴を見てみよう。特に「温良貞淑」に類する語については、この語はいずれの学校にもあらわれていながら、その扱いや修飾の仕方は学校によってもっとも異なっており、学校の特色はこれに類する語によって特にあらわされていると見てよいので、それを中心に見てゆくことにする。

鳥取県立鳥取高等女学校の場合、実にいろいろの徳目が並べられており、学校として精神教育が活発であったことを物語っているが、他の2校のように、その内容が一般的に言って強烈な学校の方針の下に統一されていることがない。ただし、性格を表わす「温良貞淑」はここでは「温順貞淑」と「順」に変えられている。

京都府立第1高等女学校の徳目は、この性格を表わす語自体は「温良貞淑」のままであるが、それに加えて「外柔内剛」という言葉が加えられ、頻度からいうとこの方が多い。さらにそれは「桜・柳」の木を使って、あでやかに象徴されるに至っている。それと同時に「冷水摩擦」の実行が説かれている。

栃木県立宇都宮高等女学校における特色は、生活態度としての「質実剛健」の強調にある。性格としては、「温良清貞」となり、「清貞」が加味されてくる。この「清貞」と相俟って、「至誠」が加えられ、「操」が加わってくる。このうち「操」はさらにシンボル化され、学校の前の川にかけられ、毎日登校下校時に渡る橋に、「操橋」と名づけられて具象化されてくる。この学校では、後、同窓会にも「操会」と名付けている。

校門を入りますと操橋があり、毎日行きかえりその橋を渡り女は操が大切であることを橋を渡る度ごとに教えられましたから、男女の交際等実にきびしかったことが1番の思い出です。（栃木県立宇都宮高等女学校 大正9年卒）

なお、徳目教育に熱心ではなかった東京府立第2高等女学校では、散発的に出てくる標語は独自の校風をそなえたものではない。しかし、その教育内容は、やはりかなり独自のものを持っていたようである。その状況を伝えてくれる卒業生の記述を引用しておく。

大正中期の高等女学校としては珍しいほど進歩的・自由・平等で、特に校訓などはありませんでしたが、至れり盡せりの教育をして下さったと今でも感謝しています。具体的には次のようなものです。

- ①級長（現在の学級委員）はおかず、1週間交替で2人ずつ級長の仕事をした。
- ②優等・皆勤賞等なく、卒業の時5ヶ年皆勤者だけ賞状が出た。
- ③毎月1回校外教授（東京近郊の名勝・施設・病院・工場見学）あり。ノート、弁当以外は持たずに行き、あとの時の週番が見学報告書を学校に提出。
- ④低学年の時1週間おきにお話の時間があり、その時皆の前に立って話し、言葉づかい、態度等の注意があった。（東京府立第2高等女学校 大正11年卒）

3 教育理念の時代的変遷

前節で見えてきたような徳目が、いつの時代にあらわれてきたのかを見てみよう。

高等女学校の標語でもある語である「良妻賢母」は、どこでももっとも頻繁に長期にわたって表われている。栃木県立宇都宮高等女学校では明治37年卒の卒業生から、鳥取県立鳥取高等女学校では明治40年の卒業生からあらわれて、ほぼ調査対象の終わる大正15年まで続いている。京都府立第1高等女学校でも同じ頃の38年からあらわれているが、大正10年でもって終わっている。これらの3つの学校では、それ以前の卒業生でこうした教えられた徳目の記入してあるものはごく少ないから（本人が死亡して情報提供者でない場合はこの項目は記入してあることが稀である）、「高等女学校令」以後のごく古い時代からこの徳目は教え込まれていたことが考えられる。もともと徳目教育を行なっていない東京府立第2高等女学校だけは例外で、この教育目標が挙げられてくるのは大正3年の卒業生からである。

「天皇」「愛国心」「忠」など国家主義的徳目は、明治40年から東京府立第2高等女学校と栃木県立宇都宮高等女学校で、43年から鳥取県立鳥取高等女学校で、京都府立第1高等女学校では少し遅れて大正3年卒の人達から挙げられている。しかし、それらは、東京府立第2高等女学校で大正7年卒、京都府立第1高等女学校で大正8年卒業者以降姿を消すのに対し、栃木県立宇都宮高等女学校、鳥取県立鳥取高等女学校では、調査対象者の終わる大正15年の卒業生までずっと、しかもかなりの頻度でもってあらわれてくる。

「親」「孝」という家族主義的徳目も、「忠孝」という対になった言葉があることもあって、上の国家主義的徳目のあらわれとほぼ平行して出てくる。この国家主義、家族主義の両徳目は同一歩調をとっているように見受けられる。

生活態度を質素にするようにという言葉は、「質素」「質素儉約」「質素節約」「質実剛健」など学校によって多少表現がかわっている。早くから、「質実剛健」又は「質素剛健」と「剛健」のついた表現を取っていたのは栃木県立宇都宮高等女学校であり、明治38年卒からあらわれている。

東京府立第2高等女学校では、「堅実」が明治41年卒、「質素」が明治43年卒からはじまっている。「質実剛健」の表現もかなりあるが、それでも、「質素」「儉約」といった表現が強く、また、それは、この場合、特に衣服への具体的言及となってあらわれてくる。たとえば、「袴の丈は床上5寸、袖丈はクジラ尺の1尺8寸以下」「木綿の着物」「白衿」「元禄袖」など。この「質素」の精神は、徳目教育の少ない東京府立第2高等女学校で、全期間を通じて特に強調されてきたようである。

京都府立第1高等女学校では明治44年卒から大正9年卒まで、鳥取県立鳥取高等女学校では大正10年以後になってあらわれてくる。

さて、「温良貞淑」に類する性格への言及であるが、栃木県立宇都宮高等女学校では大正3年卒業生からかなり出てくる。そして、ここでは同時に「温良清貞」という語となってあらわれていた。同校の『100年史』¹⁴⁾に掲げられた年表によれば、「温良清貧」の額が講堂に掲げられたのは明治45年とあるから、その頃からこの語が同校で語られるようになったのであろう。卒業生による「温良清貞」の記

入が出てくるのは、大正3年卒業者からである。なお、『100年史』では「温良清貧」となっているが、卒業者の記述から見れば、これは「温良清貞」の誤ちである。また、操橋が設けられたのは、同じく『100年史』⁽⁶⁾によれば、明治39年以降とある。これは木橋であったが、大正4年に石橋にかけかえられた。この時、「操橋開通式の歌」まで作られ、盛大な開通式が催されたもようである。「操の鏡」として、「操」という語が卒業生の記述の中に出てきたのは、明治42年からのことである。「至誠」の語は明治40年からはじまっている。

京都府立第1高等女学校の「柳・桜」と「外柔内剛」であるが、明治39年から大正11年卒業者まで、これはともに相当の頻度で続いている。

鳥取県立鳥取高等女学校では、「温良貞淑」の「良」が「順」に入れかえられ、「温順貞淑」となったが、これは、明治37年卒から大正10年卒業者に至るまで続いている。

(国家主義)		(家族主義)		(生活態度)		(性 格)	
東日本		東日本		東日本		東日本	
M40~T7	M40~T15	M41~T9	M45~T15	M41~T15 質素	M38~T15 質実剛健	M41~T8	M42~T14 温良清貞 操・至誠
大都市	地方都市	大都市	地方都市	大都市	地方都市	大都市	地方都市
T3~T8	M43~T15	M42~T7	M43~T14	M44~T15	T10~T15 質素	M39~T13 外柔内剛 桜・柳	M37~T10 温順貞淑
西日本		西日本		西日本		西日本	

以上を簡単に整理してみよう。ここで主な調査対象として選ばれている4つの学校は、東日本と西日本、大都市と地方都市というメルクマールを考慮して選択したものである。各カテゴリーに属するのが1校ずつあるので、ここで選ばれている学校がそれぞれのカテゴリーをはたして典型的に代表するサンプルであるかという疑問が残る。しかし、あえてこれらの学校がそれぞれ4つのタイプを典型的に代表すると仮定して整理し、若干の法則性らしきものを探り出そうとすると次のようになるであろう。

1 東日本の方が西日本よりも、中央の傾向を教育方針の中にいち早く反映したのではないだろうか。

2 大都市の方が地方都市よりも、いったん定着した教育の傾向が消え失せるのが早いのではないだろうか。大都市はかわり身がはやいのに対し、地方都市の場合は、いったん1つの教育方針が定着すると、それがなかなか消え失せず、長く残存する傾向にあったのではないだろうか。

前述のように、4つの学校がその典型に対して代表性を主張しうるか否かの疑問が残るが、この2点を学校による採択という点から見た場合の教育理念伝播に関する1つの一般化された法則として、今後さらに綿密に検討されなければならない仮説として提示しておきたい。

4 教育理念の荷い手

こうした徳目による理念の教授の学校差、あるいは時代差は、理念の伝達者が誰であったかという

ことと深く関わってくると思われる。校訓や繰返し聞かされた言葉について、それを伝達したのは誰であったかを問うてみた。

まず、校訓や繰返し聞かされた言葉について、記入の全然無いもの180名、何らかの記入はあったが、それを誰が伝達したのか不明なものは90名あり、誰かの表示のあるのは195名であった。

その内容を見てみると、校長・教頭を挙げたものは134名(68.7%)、担任38名(19.5%)、舎監2名(1.0%)、教科の教師21名(10.8%)という配分である。校長・教頭、特に、校長が行政的のみでなく、教育方針についての指導力を大きく発揮していたことが示されている。教科担当教師の内訳は、国語の教師10名(5.1%)、裁縫・家事・手芸6名(3.1%)、歴史・地理1名(0.5%)、体育・音楽・教育4名(2.1%)というようになっている。国語、家庭科の教師が比較的影響力をもっていた。

卒業年次による違いを見ると、年が新らしくなるにつれて、校長・教頭を挙げるものの率が低下し、担任教師の比率が増加し、また、教員にいろいろバリエーションが出てきている。早い時代には校長・教頭が強力な教育的リーダーシップを発揮し影響力をもっていたが、次第にそれは弱まり、諸々の教員に分散されるようになってきたことを示している。

1表 影響を与えた人——卒業年別

()内%

卒業年	明治30~32	33~35	36~38	39~41	42~44	明治45 大正3	大正4~6	7~9	10~12	13~15	全 体
校長・教頭	1 (100.0)	— (—)	4 (80.0)	15 (88.2)	12 (75.0)	16 (76.2)	21 (77.8)	27 (69.2)	18 (66.7)	20 (47.6)	134 (68.7)
担 任	— (—)	— (—)	1 (20.0)	1 (5.9)	3 (18.8)	3 (14.3)	4 (14.8)	7 (17.9)	6 (22.2)	13 (31.0)	38 (19.5)
舎 監	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	1 (6.3)	— (—)	— (—)	1 (2.6)	— (—)	— (—)	2 (1.0)
(修身)国語	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	1 (4.8)	2 (7.4)	2 (8.1)	— (—)	5 (11.9)	10 (5.1)
裁 縫 等	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	1 (4.8)	— (—)	1 (2.6)	1 (3.7)	3 (7.1)	6 (3.1)
歴 史 ・ 地 理	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	1 (2.4)	1 (0.5)
体育・音楽等	— (—)	— (—)	— (—)	1 (5.9)	— (—)	— (—)	— (—)	1 (2.6)	2 (7.4)	— (—)	4 (2.1)
校訓等記入なし	6	17	22	20	25	19	17	15	22	17	180
不 明	1	6	9	2	11	11	9	10	19	12	90
計	1 (100.0)	— (100.0)	5 (100.0)	17 (100.0)	16 (100.0)	21 (100.0)	27 (100.0)	39 (100.0)	27 (100.0)	42 (100.0)	195 (100.0)

学校によっても違いははっきり出ている。校長・教頭が大きく影響を与えているのは、京都府立第1高等女学校、栃木県立宇都宮高等女学校である。校長の教育的リーダーシップがあまり強力でない東京府立第2高等女学校、鳥取県立鳥取高等女学校では、かわって担任教師が生徒に影響力を及ぼしている。このことは先に見た各学校の徳目の個性化と密接に関係をもっていることが明らかである。校長の強いリーダーシップは特徴ある教育方針となり、京都府立第1高等女学校や栃木県立宇都宮高等女学校でみたように、シンボル化するまでに結晶している。

2表 影響を与えた人——高等女学校別

()内%

高等女学校	東京府立 第2高女	京都府立 第1高女	栃木県立 宇都宮高女	鳥取県立 鳥取高女	その他	全体
校長・教頭	15 (46.9)	51 (87.9)	33 (78.6)	19 (44.2)	16 (80.0)	134 (68.7)
担任	11 (34.4)	5 (8.6)	3 (7.1)	17 (39.5)	2 (10.0)	38 (19.5)
舎監	— (—)	— (—)	1 (24)	— (—)	1 (5.0)	2 (1.0)
(修身)国語	2 (6.3)	— (—)	3 (7.1)	5 (11.6)	— (—)	10 (5.1)
裁縫等	2 (6.3)	2 (3.4)	— (—)	1 (2.3)	1 (5.0)	6 (3.1)
歴史・地理	1 (3.1)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	1 (0.5)
体育・音楽等	1 (3.1)	— (—)	2 (4.8)	1 (2.3)	— (—)	4 (2.1)
校訓等記入なし	56	42	41	25	16	180
不明	16	17	23	27	7	90
計	32 (100.0)	58 (100.0)	43 (100.0)	43 (100.0)	20 (100.0)	195 (100.0)

「自由記述欄」の中に、教師の面影を伝えているものがいくつかあるので、参考までにあげておこう。京都府立第1高等女学校では、校長が強い個性を発揮していたことが、ここでもうかがいえる。

- ・私共女学校に入学当時は課目に英語がありませんでした。丁度その頃他県から見た女の先生がありました。その先生は、女学校では体操や遊戯を教えていらっしゃいましたが、英語が大それたお上手と言う事を聞きましたので教えて頂く様御ねがいに集まりましたところ、いと心よく承知して下さいましたので、喜び勇んで友達と一諸に放課後に集る事にしました。今考えてもほんとに有難かったと感謝して居ます。(鳥取県立鳥取高等女学校 明治38年卒)
- ・ことに数学、理科の先生がよいお方で、今なお先生のお写真にお礼を申し上げます。今日85歳の身で色々おぼえられるのも先生のたまものと感謝の言葉もございません。(栃木県立宇都宮高等女学校 明治40年卒)
- ・国語の先生(小西)の読み方がまだ耳に残って居ります。(栃木県立宇都宮高等女学校 明治45年卒)
- ・卒業の頃は高木光子先生という先生に教えていただいた。その先生の余裕のあるあたたかい人格は今でもなつかしく、私の一生にありがたい影響を与えて下さった。(東京府立第2高等女学校 大正2年卒)
- ・私共の受持の金栗先生(マラソン)のおかげで、この年になっても足が丈夫で毎日元気にして居られるのは先生のおかげと感謝いたして居ります。(東京府立第2高等女学校 大正15年卒)
- ・学校長の健康管理のやかましかったお蔭で、生来弱い体であった私が見ちがえる健康になり感謝の日々である。(京都府立第1高等女学校 明治41年卒)
- ・校長先生以下諸先生が一体となって教育に学術に最善をつかさね、生徒も寸暇を惜しんでよく勉強しました。探究心好學心をやしたわれたのも恩師のたまものと感謝しております。(京都府立第1高等女学校 大正3年卒)
- ・河原・大石のお2方の名校長の下にてプライドを持って終始過しました。(京都府立第1高等女学校 大正9年卒)

5 高等女学校の社交的・心情的意義

卒業生達は、人生の晩年に当って、自分の受けた高等女学校についてどのように評価を下しているであろうか。これに関する項目は調査票には無い。しかし、調査票の終りに設けた「自由記述欄」に

それに関する記載が数多く見当るので、それによって整理してみよう。なお、記述に当っては、他の箇所での引用も同様であるが、文章は()による挿入などもふくめて原文のままであり、また、漢字使用も原文のままである。ただし、旧かな遣いは新かな遣いに、かた仮名や変態仮名、旧漢字、漢数字はそれぞれひら仮名、新漢字、算用数字に直し、若干の送り仮名を変更してある。句読点はこちらで適宜挿入し、明らかに誤りであるような漢字などは若干訂正してあるが、文章などは、ややおかしくともそのままにしてある。

まず、「自由記述欄」を一読して、第1に強く受ける印象は、いわば社交的効果とでも言うべきものである。これは、調査対象となった年代のすべてを通じて、またすべての学校を通じてひじょうに高い頻度で語られているものである。かつて同じ学校や教室で学んだものどうしの交際は、卒業後60年70年たつ人生の晩年に至るまで続いている。そして、それは単に続いているといったのみではなく、お互の動静をひじょうによく承知しているのでもわかるように、まことに親密な交りであり、晩年の幸せの源泉であり、若返りの秘薬であり、さらに、老後の生きる支えとなっている。

先にも記したとおり、以下に引用するのはまったくの「自由記述欄」への記入であり、とりたてて同窓会や級会の存否を聞いたものではない。それにも関わらずこれだけ多くの人がこのことを記載しているということは、それが彼女らの生活の中でいかに大きな比重を占めているかを物語っている。少量が多いが、いかにこれが強烈であるかその全幅を示すために全部を掲げておく。

栃木県立宇都宮高等女学校

- ・母校100年祭には出席出来ず誠に残念でたまりませんでした。本当に女学生時代はなつかしいです。今ではクラスの方おたより下さる人なくなってさびしゅうございます。(明治37年卒)
- ・当時高女が少ない為県下各地の有力者(特に地主)の女性が集っていたので楽しい思い出一杯。卒業後も非常に親しく生涯の友として深い交際をしており、人生が豊かに過していた。教育は有益であった。(明治38年卒)
- ・現在満85歳ですが、女学校の時のクラス会を年2回開いております。だんだん減って(死亡して)7人になってしまいました。(明治40年卒)
- ・入学当時より一緒に遊んだしん友1人今だに交さい致し、楽しみにして居ります。(明治45年卒)
- ・日光に嫁し、酒造家を事情ありてやめ苦勞しましたので、クラス会は途中から入りましたが、皆元気な人が多くて一昨年まで毎年クラス会を宇都宮に集りやりましたが、2年ばかり致しません。(大正2年卒)
- ・思い出も1番多い年頃でしたから4年間の女学生生活は今でも忘れられません。年1回は集ってしらが頭をふりながら思い出に花を咲かせております。75歳。友人も少なくなりました。(大正6年卒)
- ・卒業後50何年かたちますが、その年の春のクラス会(若葉会)は毎年毎年(戦争末期の何年かは休みましたが)未だ東京と宇都宮で開催致してなつかしい思い出を語り合っておりますが、もう70歳、一葉ずつ落ちて、落葉会になってしまいました。淋しい限りです。(大正11年卒)
- ・純情で何事も善意に解釈し、人を疑わず、温い友情が50数年後の今日迄つながり、毎年1回の級会を開いているのも、その頃に培われた教育の賜物であると感謝しています。友人が居なかったらどんなに寂しい事でしょう。(大正11年卒)
- ・私の生涯を通じて最も楽しかった時代でした。学生時代の親友が、半世紀もすぎた現在でもご交際している事をうれしく思っています。(大正14年卒)
- ・現在でも同窓会をひらき、当時の友達と集っています。当時からの親友とも、現在交際しております。(大正15年卒)

京都府立第1高等女学校

- ・晩年迄女学校の同窓会又は友人の方々とは深い交際があり、趣味の集りなどしてたのしんでおりました。(明治41年卒、本人死亡につき、娘が記入)

- ・親友2, 3人(同級生)とは年賀など文通し, 今も心の支えの一環となっているようであります。(明治42年卒, 本人病氣中にて子どもが記入)
- ・学校時代の親友3人, 皆他界して淋しいです。(明治45年卒)
- ・高女時代のクラスの友達は3分の1しか残って居りません。80歳を過ぎた老婆達にはすべては昔なつかしく, 悲しかった事も苦しかった事も皆消えて楽しかった事のみ残り, 現在ずっと廻し手紙をしてなつかしんで居ります。(大正3年卒)
- ・農山村からはるばる(?)遊学させてくれた両親に感謝し, そこでえた友人達と今も交りをつづけておる仕合せを感謝しております。(大正3年卒)
- ・苦楽を分かち合った旧友とは今も親しみ深く, クラス会を毎月開いて老後を楽しんでいます。本年5月には, 卒業60周年及喜寿(77歳)の祝の大クラス会を催し, 全国から旧友46人集り, 盛大に開かれ, よい思い出になりました。(大正6年卒)
- ・同窓, 皆, 今尚仲よくしています。(大正7年卒)
- ・きびしい家庭ときびしい学校のおかげでいいお友達が出来て, 時々あった不幸にもたえて明るい人生を送れた事を喜んで居ります。1年毎(春, 秋)にクラス会の中からはなくなる方が出来て淋しいことです。(大正8年卒)
- ・今だに小学校女学校を同じくした親友3人と時々会い, 親しくしている程よい時代でした。(大正12年卒)

東京府立第2高等女学校

- ・今ではクラスが7名しか生きておりませんが, 山川菊栄さんが一生懸命努力されて廻文をまわし, 安否を認めて次へまわし, やっと一昨日私も認めて次の方へまわした所です。45人中7人の在世人となりました。然し皆元気で残党は生存しておる次第です。(明治40年卒)
- ・教室の空気は低調で面白くなかった。よかったのは友達との交情だけ。卒業の時44人だった同級生のうちいま8人だけ生きている。何人もつづけて……(判読不明)廻状を今その8人でつづけている。(明治40年卒)
- ・クラス47人中現存の者13名あり, 私は最年少(85歳)ですが, 回章をしていますので皆さんの動静はお互に判っています。(明治41年卒)
- ・親しくしていた友だちも数えるほどしか残って居りません。(大正2年卒)
- ・5年間の学校生活はたのしく女学校入学の時の親しい友人があり, 2人で旅行したり, あって話をする事, ととてもたのしいです。(大正5年卒)
- ・第2高女時代のクラス会, 今でも春秋2回あり。大体14~5人集り, やはり第2の誇が捨てられない。(大正7年卒)
- ・1クラスで, 5年生迄で250名はなかったので親しみやすく, 今でも上級下級の方と親しくしている。(大正9年卒)
- ・1クラスの人数が少なかったので, 関西でも東京でも春秋同窓会が今でも開かれて, きびしかった主任の先生の事や, 試験試験で夢にまで見た話等, お話はつきませんで楽しゅうございます。(大正9年卒)
- ・末だに春秋2回のクラス会で楽しい集りをしております。(大正10年卒)
- ・当時は1クラス50人でしたから学校全部で250人です。皆仲良く楽しく勉強いたしました。卒業後も12人亡くなりましたが, 今だにクラス会と云うと20人程集まり, 昔話に花を咲かせて居ります。年を取っても学校の友達は良いものです。今の学生を見て居りますと, 何事も違い過ぎてあきれられるばかりです。(大正11年卒)

鳥取県立鳥取高等女学校

- ・私達のクラスは61歳の年から年1度クラス会を今日迄続けて, 温泉地に集りたのしかった昔語りをして居ります。今は各地に別れ, 鳥取での集会は6人になりました。淋しく成る程なつかしさをまし, 会合の当日は皆若返った気持ちで集って居ます。(明治40年卒)
- ・目がわるくてうまく書けませんが……だんだん友だちが少なく成って淋しい事ですが, 昨年は卒業写真を大きく引きのばして貰い時折出して懐かしんで居ました。先日は鳥取へ旅行し, 先ず母校を見に行きました処, 表は武徳かんでかくれていました。残念でした。(明治44年卒)
- ・みどり濃き久松山下の学びやのなつかしい思い出を忍びつゝ, 時々友達と連絡し合って学生時代をなつかしんで居ります。(大正11年卒)
- ・姑が主人亡きあと97歳まで長命でしたので何処へも行った事ありませんでしたが, 50年目に初めてクラス会に

出席して旧交を温めました。それから毎年、春の母の日にクラス会がありますので、お友達にお会いするのを何よりの楽しみにして居ります。(大正12年卒)

- ・親友も多く、この年になってまだ親しく文通し、遠い北の地から心を通わせて居ります。神戸で戦災に逢い、北海道へ開拓民として移住しました。46年卒業後、始めて鳥取へ行き、クラス会を開いて貰いました。(大正14年卒)
- ・昨年50年記念で(卒業)顔を合せました。……年をとると何もかもなつかしい思い出となって走馬燈の様かけめぐります。昔を今になすよしもがな。(大正15年卒)

その他

- ・規律がきびしく上級下級の別がはっきりしていた(寄宿舎内)。当時は辛かったが、今になってもなつかしい交りが続いている。(山形県立山形高等女学校 大正14年卒)
- ・晴天も有り雨降りも有り2女を恵まれて夫には先立たれましたが、私のクラスメートも大半は末亡人になり、矢張り男の方が苦勞が多い事を物語って居りましょう。明治の人間は矢張り明治の人が恋しく、逢う度に、まだこの人も元気かな…とったり、向様も思ってくれて居るのかと思ひ、何々と笑いたくなります。友達と逢えば女学校時代の話に花が咲き、若返りの秘薬だと言えれば秘薬でしょう。(私立椛山高等女学校 大正15年卒)

次にあげるのは心情的意義とでも呼びうるものである。高等女学校時代の交友が、50年後、70年後にいたるまで続き、生きる張り合いを与えていると同じように、また、その当時の思い出は楽しいものとして残り、その頃をなつかしんでいる。

大勢の人は、ただ、「楽しかった」、「なつかしい」と記してあるが、中には、特に、その楽しさやなつかしさの源泉を記しているものもある。その典型的なものをひろい上げると、栃木県立宇都宮高等女学校では校歌であり、東京府立第2高等女学校ではスポーツであり、京都府立第1高等女学校では宮様と同級であったこと、などである。

栃木県立宇都宮高等女学校

- ・学校は楽しかったです。(明治40年卒)
- ・今でも高等女学校時代の校歌がなつかしく、時々口づさんで居ります。(明治42年卒)
- ・農村より出て宇都宮の女学に。入学式の校歌の美しさが今だにわすれられません。60年過ぎた今だに口づさむ時があります。(明治45年卒)
- ・大変楽しかった。亡った先生方がなつかしい。(明治45年卒)
- ・4年間寄宿舎にお世話になり、ほんとうになつかしい一生の思い出です。(大正3年卒)
- ・学生時代は楽しかった。(大正4年卒)
- ・あまりにも昔の思い出、今70を迎えんとしている今日、小学校でも女学校でも、校長先生が事ある度に教育勅語を奉読されたあの頃は、あまりに変わって行く時代の変遷に、いいようのない思い出となっています。(大正13年卒)
- ・伝統のある女学校で学ばせたいという親心から宇女校に入学させていただきましたが、これによって本当によかったと思っています。(大正14年卒)

東京府立第2高等女学校

- ・楽しい5年間でした。(大正3年卒)
- ・5年間は今から思えば楽しかった。(大正7年卒)
- ・府立第2高女の○○(判読不能)生たりしことに今も誇りをもっています。(大正8年卒)
- ・女子バスケットボールの始まる頃で、在学中にはじめての選手権試合もあり、ほんとうにたのしい時代でした。(大正12年卒)
- ・5年間の女学校生活は終生忘れる事の出来ない楽しいものでした。殊に運動が盛んな学校でしたので、種々の運動に参加した種々の思い出が、一層この感を深くしていると思います。(大正15年卒)

京都府立第1高等女学校

- ・楽しくて夢中で過しました。(明治43年卒)
- ・生涯通じての思い出としてとてもよい立派な学校で青春時代の教育をうけた事を感謝しています。(明治45年卒)
- ・楽しく勉強したものでした。時代おくれかも知れませんが、やはり昔の時代がなつかしく思い出されてしかたありません。(大正4年卒)
- ・ほんとうに良き時代でしたことを感謝しています。(大正5年卒)
- ・府立第1は本当によい学校でした。心の誇りとして居ます。(大正5年卒)
- ・大正の平和なころの女学校、まことに楽しく過しました。(大正8年卒)
- ・最も良き時代に女学校生活を楽しく過しました。(大正12年卒)
- ・同級生に久邇宮督子殿下も入学だったので、先生達も熱心な方多し。我々は幸せだったように思う。(大正13年卒)

鳥取県立鳥取高等女学校

- ・楽しかったです。テスト前は辛かったです。音楽の時間が楽しみでした。理科の時間も面白かった。秋の運動会もたのしかったです。(明治43年卒)
- ・今から思えば、父はなくともそれ程みじめにも思わず、長い人生、あどけない一番気楽な時であったようです。同じ方向の友達との学校のゆきかえり、兄弟むつまじい事など、限りないなつかしきで涙が出ます。(大正4年卒)
- ・楽しかった。学期末試験の時は苦しかった。友達とよく遊んだ(休けい時間15分位)。かいせん塔、ブランコ、遊動円木、ボール遊び。卓球は特に面白かった。(大正6年卒)
- ・四季折々楽しいことばかりでした。今でもあの頃をなつかしく思って居ります。(大正11年卒)
- ・養女とはまだ知らない頃で、一番幸福な時代だったと懐しく思い出します。(大正14年卒)

そ の 他

- ・人生の苦勞を知らず、私にとっては最良の4年間だった。(奈良県立五條高等女学校 大正14年卒)

6 高等女学校教育への評価

はじめに、高等女学校で行なわれた精神教育への評価に当るようなものを探してみよう。これも、先と同じく、「自由記述欄」への記入であり、特にとりたててこの項に関しての評価を要求したのではない。

- ・「修身、倫理をぜひ復活して下さい」という本人の強い希望がございました。(東京府立第2高等女学校 明治41年卒 本人に聞いて子どもが記述)
- ・修身は今もやってほしいと思って居ります。(栃木県立宇都宮高等女学校 明治45年卒)
- ・世の中の事など何も知らず、親の云うまゝ顔も知らないで嫁ぎ、36歳で子供6人を残され寡婦になり、商売をし乍ら、父親のない子供の幸せをのみ、自分の事など(先々のこと)考えても見ませんでした。子供も各家庭を持ち、子供も出来、やれやれと思う間もなく長男、次男に先立たれ(2人共51歳で死別)、50年余住みなれた土地をはなれて4男の所へ引きとられ、余世を送って居ります。知らない所へ来て友達もなく、今は書道を習ったり俳画を習いに行ったりして居ります。私にとって一番苦難の生活をした時など、学校の校訓のわけて(5)その剛毅なる精神を包むに温良なる声容をもってし、忍耐勤勉献身事に当り、もってその成功を楽しむべし、と云ふ文句は、事ある度に心にかみしめかみしめ生きぬいてきました。幸せの人にはそういうことはわからないでしょうが、修身と云うことは大切だと思います。(栃木県立宇都宮高等女学校 大正4年卒)
- ・在学中は先生の教えをよく守り、よく働き実行した。心の底まで楽しかった。教育は徹底した教えであった。現在の教育については、私が教職についていた時とは時代の流れが違うから一様には申されませんが、現在の子供は可愛想に思う。余りにも上すべりの教育、筋金の通った教育ではないと思います。今後の日本はどうなりますやら、よろしく御願ひします。(鳥取県立鳥取高等女学校 大正4年卒)

- ・修身の時間の初めには必ず教育勅語の暗唱。……人に対しては親切で人に喜ばれる様な人柄である様にとの事。家の中の者が人様には親切で人様に喜んで頂いているのです。(鳥取県立鳥取高等女学校 大正8年卒)
- ・人としてのすじ道を修めるといことは大切なことと思う。その上になつての各自の道徳づけは自由で、時代の理性にあった教理の科目は(修身といたいだが)、人生経験の浅い若い人達にとって必要なのではないのでしょうか。私共の若い時代と現代を省みて、この頃思うことです。(東京府立第2高等女学校 大正8年卒)
- ・修身のないことを残念に思います。昔は、君に忠、親に孝と教えていただいた事を思い出して、世の中が変わっても日本人である以上、小学校で子供に話していただきたいと思います。(東京府立第2高等女学校 大正10年卒)

これらの記述は、自分達の受けた精神教育を高く評価していることを物語っている。自分達の受けた教育と現在の教育を比較して、現代における精神教育の欠如をなげき、そしてそれを復活することを強く希望している。次に記載するのは、ややニュアンスが異なるが、これまでに記したものと同じ系統のものである。高等女学校教育への感謝の意を表わしている。

- ・今まで種々の難儀にあい80歳まで生きました。しかし毎日せつせと家事にいそしんでいます。昔の教育のおかげとつくづく感謝します。(京都府立第1高等女学校 大正3年卒)
- ・礼儀作法の今時一寸想像もつかないやかましい古い学校でございましたが、今ではその教育がどんなに役立つことかと感謝いたしております。(京都府立第1高等女学校 大正7年卒)
- ・先輩の卒業生達も皆社会に於ける評判もよく立派に成功され、ほんとに優秀な学校であったと今にして感謝して居ります。在学当時は若気の至りにて反抗したり、今から思えば恥かしい限りでございますが、先生方もよく御辛棒下さってお導き下さったと存じます。(京都府立第1高等女学校 大正9年卒)
- ・東京府立第2高女卒の方々は(私の時代)卒業生の数が少ないので縦横のつながりがあり、皆仲よしでした。関東大震災、戦争等苦しい事に会いましたが、皆その時々の中で立派に生き続けました。人生の終わりに近づいて色々過去の事を思い返す時、女学校時代に受けた教育が素晴らしかったと感謝しています。(東京府立第2高等女学校 大正13年卒)

高等女学校で受けた教育は長い一生の生活全般の中で生き続け、具体的に何という特定の領域の限定はないが、その時々の境偶の中で自分達が生き続ける縁(よすが)となってきたことを強く示している。

以上は一般的な生活領域に関してであったが、次は、具体的領域の記述と結びついた内容のものを拾い出してみよう。まず最初は、「生活態度」として著しい特色を示していた「質素」についてである。

- ・今思うと学校の空気は非常に質素で、それは私にいい影響を与えた。(京都府立第1高等女学校 大正2年卒)
- ・顧り見れば長い一生、専ら華美に流れず終始木綿の着物をまとって、修身の教え、教育勅語に依って、学校の方針は良妻賢母をモットーとして只一心に之つとめたと言ふ実に平々凡々と今日に至った、何等なすこともなくやがて幕を閉じましょう。(東京府立第2高等女学校 大正7年卒)
- ・第2は質素な賢実な学校で、木綿の衣服しか許されませんでした。(東京府立第2高等女学校 大正10年卒)
- ・木綿の着物に古代紫の袴、袖の長さは1尺5寸、時々担任の先生が物差を持って授業前に検査されます。現在の服装から考えるとその様です。しかし、まじめな厳しい教育を受けた事が、現在の私にとってはほんとにプラスだったと思います。長い人生の中何度か壁にぶち当たりましたが、どうにか切りぬけて来られたのもこの教育のお蔭だったと、よき学校を選んだ事を誇りに思っています。(京都府立第1高等女学校 大正15年卒)
- ・校風がとてもしびしく質素で、しつけがきびしく礼儀もやかましかったので、年をとりましてからも、皆様シャツキ

りとしてられます。それに、勉強のことも男にまけない様にと程度も高く、その当時は勉強におわれて大変でしたが、今になってみると、今の若い人たちにはまけないと思います。殊に質素の習慣は今も身につけています。当時は同志社とよいたいしょうで、府1は質素でよくべんきょうしましたがもっさりしてて、同志社の生徒は皆服装はとてもハイカラでした。(京都府立第1高等女学校 大正15年卒)

「質素」は、生活全般の基本的態度となって、生涯身についたものとして生きている。当時の高等女学校卒業者は、日本の中の、いわばエリート中のエリート層である。その彼女らが、生活態度として「質素」ということを堅持していることは、特に他の諸国と比較して考えると特筆すべきことであろう。彼女らが自分達にいかにかを誇りをもっていかは処々にうかがわれる。その誇り高い彼女らは、「質素」な「木綿の着物」を着、華美をむしろいやしむべきものとして戒めている。「質素」は、貧しい、低く評価すべきものではなく、最高に尊敬されるべき価値なのである。エリートとしての誇りなのである。こうした価値意識は、おそらく諸外国、特に今日いわゆる発展途上国といわれるような国々では、おそらく見られないものではあるまいか。少しでも上等なものを、少しでも華やかなものを求めることが、自分達の権力や階級の顕示であると考えられる社会が多い中で、「質素」を最高の価値と考える価値体系は、わが国独特のものであり、特筆に価する。そして、この理想の全国的な普及に当たって、公立の高等女学校が果たした役割は特筆されなければならないと思われる。

次いで、具体的教科内容と関わる、高等女学校で学んだ知識や技能が役立った、という記述を拾い出してみよう。

- ・在学中はあまりにもきびしくかたく厳しく教育されました。が今となれば只有難く、母校をこよなく愛し、ほこりに思っています。きびしくおしえられましたおかげで、他に1日も習いに行きませんが、今だに高級和服仕立てものにいそしみおります。(京都府立第1高等女学校 大正10年卒)
- ・4年間の短い期間でしたが、其の間に得た知識や技能が私の生活全般についての基本となり、現在に至っていることを思いますと、高等女学校の教育が偉大である事が今更のように思われます。この事は毎年行われますクラス会でもよく話題になります。(栃木県立宇都宮高等女学校 大正10年卒)
- ・楽しい高等女学校でした。その頃としては進歩的(よい意味)で、野外(校外)授業もあり、音楽学校、さんし専門学校、宮城周辺、菓子工場等々廻りました。児童学(東洋大学から講師先生がみえました)もあり、育児には役に立ちました。(東京府立第2高等女学校 大正13年卒)
- ・結婚して5年目に夫をなくしたので筆耕していましたが、大学予備校の仕事や市役所の仕事、又、京大でもそれによってしばらくつとめて論文など筆耕いたして居りましたので、高女出ていてよかったと思いました。英語や図面などの時、たすかりました。(京都府立第1高等女学校 大正14年卒)
- ・日本民俗衣装を永久に残し、世界に広めたく、帯の実用新案を特許庁に提出し、登録されました時、女学校時代の裁縫の厳格さに感謝できました。今その普及に、年を忘れて、世界を相手に頑張ってます。(栃木県立宇都宮高等女学校 大正15年卒)

高等女学校で受けた教育の中で、知識、技能、すなわち教科教育に関する評価を記述したものの数は以上のように少ない。この理由は、「教科教育は当然」という考え方から殊さらとりたてて記述されなかった、あるいは、「役に立たなかった」から記述されなかったという2様に考えられよう。しかし、次のことには注意を喚起しておきたい。すなわち、今まで多くの、彼女らの記述による文章を引用してきているが、それらは、ごくわずかの文句を除いて原文のままである、ということである。彼女ら

の文章力はひじょうに程度が高いことがわかるであろう。学歴からいうと、大部分のものが高等女学校を最終学歴としているから、これらの文章力は、高等女学校時代およびその後の読書生活等によって培われ、維持されてきたものであることがわかる。いずれにせよ、高等女学校時代に、学校教育が修了してもその後の自己学習をこの程度には継続できる基礎能力が培われていたということがいえよう。それだけに、勉強がきついと感じた人もいたようである。なお、このほかに、記載が大部分、しっかりした、ひじょうな達筆でなされていることも付記しておきたい。

・非常に勉強がむつかしかった。最近同級生に聞いた話だが、私の勉強した高等女学校は東京でも非常に優秀な高等女学校で、入学生は1番2番ばかりだった由。それでみんな頭がよく勉強がよく出来て、凡庸な私は非常に困った。(東京府立第2高等女学校 大正2年卒)

学校教育は、直接的に与えた精神教育、知識、技能の教育、生活態度以外にもいろいろの影響を与えている。学校当時行った運動を続けている、学校当時行った訓練のおかげで皆の前で話せる、学期末の試験に苦しんだおかげで辛抱強さが養われた、厳しさのおかげで社会教育での活動に役立った、通学に長時間歩いたおかげで今でも足が丈夫である、健康である、等である。

・至らなかった勉強でもここ20数年来、盲目のハンセン氏病の人達(〇[判読不明]津だの東村山だのに療養所がある)に短歌の朗読を日本点字図書館を通して送りつづけているが、これは専門教育をうけたたまものではなかったかと思っている。(東京府立第2高等女学校 大正5年卒)

・学期末には2回ずつの定期試験があり、とても苦しいのが思い出です。でもそのおかげで、何事にも辛抱強く頑張る力の出来た事、うれしい賜です。(京都府立第1高等女学校 大正6年卒)

・私の人生で最も楽しい思い出は学生生活でした。教育のあり方も今の学校教育からみれば想像以上に厳しいものでした。この4年間の教育が私の社会教育的活動にどんなに役立ったことでしょう。私はいつもこの学校に学んだことを誇らしく思うと同時に、父母への感謝の気持ちでいっぱいです。(栃木県立宇都宮高等女学校 大正11年卒)

・低学年の時1週間おきにお話の時間があり、その時皆の前に立って話し、言葉づかい、態度等の注意があった。引っ込み思案の私も、このお蔭で後に人の前で話せるようになった。(東京府立第2高等女学校 大正11年卒)

・私共の女学校は当時日本1位の強力なスポーツ学校でした。テニス、バスケット、バレー(極東大会出場)、陸上競技、水泳と「竹早チーム」の名を誇っていました。私もテニスをして、今も時々70歳でしています。(東京府立第2高等女学校 大正13年卒)

・女学校4年間は自宅から6k離れた学校に毎日徒歩で通学致し、無遅刻、無欠席で通した事が、現在の健康の基となった事と存じます。……大正10年時代は、田舎では女学校に入るという事は稀少価値があり、それだけに真しな態度で始終通し今でも当時教った事は身につき、子女の教育に筋の通った意見を持つ事が出来たと感謝しています。(鳥取県立鳥取高等女学校 大正14年卒)

・田舎の貧農に育ちましたが勉強が好きだったので毎日1時間余の道を歩いて通学致しました。未だ自動車も通っていない時代だったので、どんな事でも歩かなければなりません。4年間よくも通い通す事ができたと自分ながら今になって見ると感心しています。そのお蔭で現在でも足は丈夫で、旅行をしても若い人について可成の石段でも歩いて平気です。(栃木県立宇都宮高等女学校 大正15年卒)

以上は、高等女学校教育のプラスの評価であった。ほとんどの記述はプラスの評価をしているのであるが、若干のものはマイナスの評価をくだしている。最後にそれらの記述をあげておこう。

- ・2 こと目には宮様も御在学の有名校だからと先生にいわれ通しできゅうくつでしたが……（京都府立第1高等女学校 明治44年卒）
- ・当時の授業は、点を取るだけにはあまりにやさしすぎた。それなのに外のものをみつけて勉強することに気がつかなかったのは残念至極。（長野県立上田高等女学校 大正6年卒）
- ・全心身金しばりの様な状態（女学校在学中）。思い出しても不快。（鳥取県立鳥取高等女学校 大正8年卒）
- ・残念なのは、校風に依り、2度と戻らぬ少女時代を出来る丈憎らしい格好で過した事です。（栃木県立宇都宮高等女学校 大正11年卒）
- ・毎日ふわふわと過していましたが、何故もっとしんげんに勉強しなかったのかと今だに悔まれます。（東京府立第2高等女学校 大正15年卒）
- ・高等女学校の私の時代は知育偏重の時代で、体育など全く顧みられませんでした。人間形成の面が全くおろそかにされて、ただ知識を追い求めることに教師も生徒も専心したようでした。この点はみんなが残念に思っています、今でも。（東京府立第2高等女学校 大正12年卒）

(註)

- (1) 拙稿『『賢母良妻』から『良妻賢母』へ——明治28～31年の高等女学校論——』『聖徳学園岐阜教育大学紀要』第5集, 1978, pp.81-93。
- (2) 調査方法や回収率についてのくわしいことは『第37回日本教育学会大会発表要旨』を参照されたい。
- (3) 上記『『賢母良妻』から『良妻賢母』へ——明治28～31年の高等女学校論——』参照。
- (4) 栃木県立宇都宮女子高等女学校100年史編集委員会『100年史』栃木県立宇都宮女子高等学校, 1976, p. 372。
- (5) 同上, p. 34。